

物語風

女流詩人マギー・ランドの短き生涯

相 島 倫 嘉

プロローグ

昔日、8月の焦げ付くような暑さの京都で、旅する日本人の一学生が、同じ年頃の、輝くようにみずみずしい、西洋の一女性と遭遇した。旅の行きずりであり、言葉の不自由さにもかかわらず、たった一日——いやもっと正確には、ほぼ8時間の間に、あたかも以前からの知己であるかの如く人の目映ったであろうほど、意志の通じ合うものがあった。しかし二人が会ったのはそれきりであった。二・三あった音信もやがて絶える。それから十余年、その学生は、日本のある大学で英語を教えるイギリス文学専攻の学徒となった。ふと手にした一冊の詩集の裏表紙の写真で、再びあのなつかしい顔と出遭おうとは、誰が想像したことだろう。やがてその教師は、ロンドン大学の研究員としてイギリスへ留学することになった。詩集に付されたアドレスをたよりに、せめてもう一度、今は詩人となったあの女性を探しあて、はじめて会ったあの時のように語り合いたい、という希いが、彼にあったかどうかは定かでない。とまれ、彼はイギリスへ旅立ったのである。

1 マギーと筆者との出遭い

——書簡体による紹介

あなたと私の出遭いは、今を遡る15年も前のことでした。あなたが、詩集と、その裏表紙に刷られた一葉の写真とで、再び私の眼前に現われるずっと以前、まだ十代の終わりにさしかかったばかりのブロンドの少女でし

たし、私とて、多少遺伝的要素があるといえ、白髪まじりの中年男に今はなりましたが、当時は20歳になって間もない学生でした。

秋のよく晴れた日のことでした。私は10日余り、京都のあちこちを、さして興味もなく、むしろ青春時代のセンチメンタリズムから、魂の救いを求める巡礼としてさまよっていたのでした。あなたに会う前の日、私は大原の里を訪れ、智光さまからお話を伺ったのちに、裏山へ登りました。当時大原の里は、どこにいても澄んだ水音がきこえました。遠くの大きな量が落ちる水音と、足もとの筧を流れるちょろちょろ水。人一人いない秋の山で、私はまるで童心にかえり、小さな子供たちが積木遊びをするように、山づたいに流れる水の中に、石を積み、堰を作り、やわらかな、あるいは硬いといった風に、さまざまな水音をつくって遊びました。ふと我にかえる。それまですっかり自分自身のことを忘れていました。およそ物心がついてから、こんな風に自由で、きれいな気持ちになれたことがあったのでしょうか。私は立ち上がり、ぐるりとあたりを見渡しました。人が幾度も訪れた場所であることは、散らされた紙や空かんや、たき火の跡でもすぐ分かりました。でも、今、私がここに、こんな風に遊んでいるのを見ている者は誰もいない。自然の中で唯一人、誰にも注意を払われずにいるのに、私は確かに生きて存在していました。それまでの私は、常に他の存在との相対的位置しかもち得ない人間でした。戦争に続く、私の長い悲しい生活で、他人の目から自分を守るために、ひと時といえど心を許さぬ、哀しい習慣がついてしまっていたのです。

「今ここで死んでしまったら……」そんな考えが私の脳裏をかすめました。死体はそこかしこに幾重にもかさなった落葉につつまれ、いつかは大地と同化する。すると、確かに存在していたはずの自分も、長い非情な歴史の中では、存在していたという事実そのものさえ忘れられてしまうのだ、と考えました。

しかし私は逃げ出しました。大急ぎで山を駆けおり、観光客の群がる参道前の広場を横切り、茶店にとび込んで酒をがぶがぶと飲みました。その時の私にとって、酒は、水に翻れ、急流に流されんとする人がふと見つけ

た棒状に必死にしがみつくと、そんな役目を果たしてはいました。人は友をつくり、夫婦の契りを結び、また社会生活を営むのは、生きていればこそ味合わねばならぬ本源的なさみしさを紛わす手段ではないかと思われました。

横道にそれてすみません。でもそんな経験をした翌日、同じように悲しい心を抱いたあなたに出遭ったというのも誠に奇縁でした。あの朝、河原町三条の御幸通りの小さな宿を出た私は、銀閣寺を経て南禅寺へと疏水に沿って歩きました。左手に見えた大きな寺の門が目ざすところかと思いますと、それは禅林寺で、土地の人たちには永観堂と呼ぶ方が通りがいいようです。何気なく門を入った私は、背後の山の傾斜をうまく利用した中国風の建築のすばらしさに、しばらく見とれて立ち止まっていました。

「英語で話しかけてもよろしいでしょうか。」という、明らかに若い女性の美しい英語に、振りかえると、西洋人としては小柄なあなたが、ガイドブックを片手に、愛くるしい眼を輝かせて立っていたのでした。日本人である私が、イギリス人であるあなたに、この永観堂には、俗に「見返り弥陀」とよばれる、小さく可愛い阿弥陀さまのあることを教えられたというのも奇妙ですね。

二人はその時から、終日、随分と歩きまわりましたね。南禅寺の境内で食べた豆腐の味は今も忘れられません。あれからも何度か、あの付近へゆきましたが、いつも同じ情景が目に浮んできました。

私はあなたのことを詳しくはおききしませんでしたでしたが、なんでも上智大学で2・3カ月日本文化の講座を受け、それから京都へ下宿するようになって、3週間目とか言っていましたね。夏も終わると、9月には香港へゆき、タイピストのアルバイトをして旅費をつくり、イギリスに帰るのだと申されました。

「イギリスはどちらですか。」

「コーンウォールです。」

「ぼくは、ワイルドの『わがままな巨人の話』という中で、巨人がコーンウォールの鬼という友人のところから帰ってきた、なんていう文を読んだ

ことがありますよ。」

「ええ、あの話に出てくるコーンウォールです。」

しかし私の頭にあるイギリスの地図は、ロンドンを中心として、オックスフォード、ケンブリッジ、それに中学校の社会科でならった産業革命発生地位のものでした。夕やみせまる頃、四条までもどりましたが、何か二人とも別れがたく、もう忘れてしまいました。寺町通りの安食堂で飯を喰い、酒を少し飲みましたっけ。

私はあの頃まだ多少勤勉でしたから、今よりははるかにドイツ語が読めました。あなたのかかえた本の中にリルケの詩集があるのに気付きました。当時の日記を最近とり出してみたのですが、あれから東京に帰り、あなたの思い出を書いたところで、あなたが低い声で『ドゥイノの悲歌』の一部を朗読してくれたとありました。（この部分、私には全く記憶がないのです。）そして、そこに次の日本語訳がかかれています。ここには訳者の名は記されていませんが、私自身の手になるものかどうかは、何分年月を経た今となっては知る由もありません。

いちどだけ

あらゆる存在は ただいちど いちどだけ

それっきり

私たちもまた いちどだけ 二度とはない

けれどもこの

一度存在したということ たとえただの一度でも

この世に存在したということは これは

打ち消し難いことのような。

リルケ『ドゥイノの悲歌』Ⅸより

あなたの異国への——しかも極東の日本への旅の主目的が、失った恋の痛手を癒すためのものであったことも知りました。その悲しみの深さが如何なるものか、私の知る由もありませんが、そむけた横顔に糸ひく涙に、

私は心動かされずにはられませんでした。

私はあれから奈良をまわり、東京へ帰ったのは1週間程あとのことです。真夜中に家へ着くと、家人は既に眠っていて、玄関の戸を開くや、何日も何の連絡もせず、しかもこんな時間に帰ってくるとは、と、さんざん文句を言われました。むしゃくしゃする気持ちがいっぺんに晴れたのは、私の帰宅より先に、あなたの送って下さった絵葉書が、机上で私を待っていてくれたからです。初めて外国人からもらった手紙故、今も大切に保存しています。記念のために、ここに書いておきましょう。

親愛なるM・A

いろいろ御親切にしてください、本当にうれしかったわ。あなたに偶然お会い出来たことも、日本でのすばらし経験の一つとなるでしょう。あなたがいつかは行きたいとおっしゃっていたイギリスで、再会出来ることを心からたのしみにしております。香港についたらまたおたよりしましょう。あなたもお手紙下さい。

かしこ

M・L

それからどれくらい時が経たでしょうか、ともかく約束通りに、多少ケバケバしい香港の夜景を撮った絵葉書が来ました。しかしこれには住所がなく、お返事を差しあげることは出来ませんでした。恐らく短い滞在故に、手紙がゆき違いになっては、との配慮からだったと思います。その後12月になって、私はクリスマス・カードなるものを生まれて初めて買って、コーンウォールの住所へ出しましたが、返事はいただけませんでした。それから2・3年たって、私は既に教師になっていましたが、あなたはロンドンに出て働いていると、手短かに書いた一葉の知らせがありました。これにも「ロンドン南郊外」というだけの表示で、郵便が届きそうにもありませんでした。

智積院で等伯の桜楓図を見たとき、案内して下さったお坊さまが、「こちらはフランス人ですか。」と私にたずねられました。小柄で美しいプロ

ンドで、どうしても見なれたアングロサクソンとは思えぬ顔つきをみて、そう申されたのでしょう。

たとえお写真とは言え、再びあなたのお顔を拝見する機会が来ようとは思ってもよかったです。それに、年月の風化作用が、あなたの面影を私の胸から次第に消し去ってゆきました。

あの旅は思えば不思議な旅でした。あなたにお会いした三日後、琵琶湖を見おろす皇子山で、ひどい雨にたたられました。その時、雨宿りをしていた市民会館で、ふと話した女性が、数年の紆余曲折を経て、私の妻となりました。

実は私、近くイギリスへゆくことになっています。凡そ1年の滞在ですが、その折、ぜひともお会いしたいと存じます。今から、その日をたのしみにしています。

2 詩集 *Engraving* の旅

東京お茶の水駅で下車し、東京駅に向かって遠い方の出口を出ると、すぐ広い幅の道路が目の前を走っている。正式な名は知らぬが、明治大学の前を通り、神田の古書店の並ぶ通りと交差する道で、常に学生たちが行き来して混雑している。この広い通りを下ってゆくと、明大側に、さほど大きくはないが、文庫本の専門店があり、その他に多少ぞっき本的性格の和洋書を商っている。ある雨降りの夕方、この店に入ろうとすると、横手に山と積まれた英書があり、その大部分は小説であったが、他にもチェスの本、戯曲といった具合に種々さまざまであった。それぞれに付された値札は、高くとも200円で、その安さにつられて、傑な選択もせずに200冊ほど求めたのである。概して日本でいう中間小説的なものが多かったが、中には、私が近く直接お目にかかる J. T. Story 氏の *Little Dog's Day* なども混っていた。その中の1冊が、ロンドン南郊外アートベリにあったハワード・ベイリイ社で1970年に刊行された詩集『銘記』であった。私は勿論意識してこの書を選んだわけではなかった。二度にわけて自宅まで運んだが、二度目に多少金を用意して行ったときには、その本の山

は既に売り切れてしまい、仕方なく預けてある分だけを持ち帰った。「残念でした。」という、店の人が「イギリスへ帰る家族が一括して出したもので、こちらも安く買ったのですからサービスのつもりなんです。」と言った。さし迫った用で求めたものでないから当然のことながら長い間放置されたままであり、私が例の詩集の存在に気づいたのは翌年の夏休みに入ってからである。何気なくページをめくってゆき、裏表紙の折りかえしに到った時、そこに、夏雲を背景に、地味な白いブラウス姿の、若い女性の写真を見出したのであった。「おや、この顔」そう思っても、すぐにはマギーだとアイデンティファイ出来なかった。まだ若い姿とはいえ、すでに10余年の年月を経ていたし、その写真が出版当時撮られたものだとしても、7・8年後の姿ということになるだろう。分からなくて当然である。だが、よくみると、まぎれもなくあのマギーであった。若き芳香が、いく分ピントの甘い写真を通して伝わってきた。全身になつかしさの電流が走り、それが繰り返しかえし繰り返しかえし私を襲った。いつの間にか、私自身も20歳の青年になったかの如く、当時の思い出にひたるひと時をもつのだった。

さてこの詩集 *Engraving* を出した女流詩人としてのマギー・ランドとは、イギリス詩壇においてどのような存在なのだろうか。私は早速、近くに来た丸善の八王子出張所へ走った。大手の書店に必ずあるイギリスでの出版目録をみせてもらうためである。しかしそこにはマギー・ランドの名もなく、それどころか、出版社のアータベリにあるはずのハワード・バイリイ・プレスもなかった。「これは現在 available なものの目録ですから、過去に出たものならのっていません。この店にはありませんが、過去のものもあたってみましようか。」と親切に言って下さった。私はお願いして、その足で図書館へゆき、出版年月の1970年、71年という風に、順次目録をあたってみたが無駄であった。

「第二芸術論」ではないが、詩は小説に比べて読者を獲得することの困難なことは否めない事実である。多くの名もない詩人(または「自称詩人」)の詩集が出され、その大部分は、親類縁者・友人たちの慈悲によって存在

のかすかな証しはたてられるものの、やがては忘れられてゆく、そういう中から篩にかけられ、何らかの賞を授けられたり、優れた評者の目にとまる作品がないとはいえぬが、たとえそのような好運にあったとしても、依然詩の読者は限られている。書店や図書館の、詩に割かれる本棚のスペースが、その事実を如実に語っている。

「詩集」は、総頁数23、作品数17。B6判の変型で、一段組みであるから、いわゆる小品が大部分である。私はちょうどその頃、Elizabeth Hardwickの *Seduction and Betrayal* という評論集により、シルヴィア・プラスの存在を知ったが、マギーの作風は、何かプラスを思わせるところがあった。その特徴として「強烈さ」をあげることが出来る。ジョン・キーツは、美とは強烈さ(intensity)だと考えた。強烈さを備えたものが、逆に全て美であると言えるかは疑問もあるが、美学上でいう *aethetica* の語の成りたちを考慮すれば、当然逆も真ということになるだろう。最近邦訳の出た『釣鐘の下で』(*The Bell Jar*——『自殺志願』という名で角川書店刊)の中で、シルヴィア・プラスの自画像であろう主人公が、スキーについてほんの初歩的技術さえも知らぬのに、雪の丘の頂上から、しかも全速力ですべりおりる風景の描写がある。ここにもシルヴィア独特のはげしさを垣間みることが出来る。マギーの場合は、シルヴィアと性格の相違にもよるであろうが、髪ふり乱すこともなく、ギラギラと眼を輝かせることもせぬ、静の中の強烈さといったものが感じられる。「薬つぼ」(Gallipot)と題する29行の詩の中で、恋人との別れを描いている。好きでたまらぬ男なのに、ある一つの理由のために、男と生活の一步を踏み出すことが出来ない。その、一見なんでもなく見える理由が、実に重いのである。ソクラテスが処刑される前に、プラトンは師匠に問うたことがある。「裁判のときに、たったひとこと、イエスのかわりにノーということによって、あなたの生命はたすかったでしょう。何故そう言わなかったのですか。」と。ソクラテスは「イエスはノーということばで置きかえることは出来ぬ。」という旨の答えをした。プラトンを読むと、常に懐疑的な雰囲気はただよっているが、その源流はあのソクラテスの死にあったの

だ、と述べた人がいる。生命かけてまで守らねばならぬ、そんなに大切なものがこの世に存在するのであろうか。マギーにとってその男との別れは、この世に生きていながら“posthumous life”を生きることになるのだった。二人の男女がもう決して会わない決意をして別れるとき、男は「おまえを捨ててゆくのだ。」といった。そして後もふりむかずに、夜明けの街へと去ってゆく。そのことばを聞いたとき、女は自分がこの男を愛したことは間違っていないのだとはっきりと悟るのである。この愛は不毛であったのではなく、この世に愛し合った二人の男女が存在したが、ただよくある世の障害のために、共に生活するスタートがきれなかっただけだったのだ。女はいう。「もしあなたが、こんな男らしい語彙をもっていると知っていたら、私はどこまでもあなたにすがりついて行ったことでしょう。」と。「おまえを捨てる」とその男が言った途端に、女は自分がはじめて一個の人間としてこの男から扱われたのだと感ずるのであった。これまた強烈さでなくて何と呼ぼう。

さてこの詩集の出版元を探しあてる作業は、もうあきらめざるをえないかに思えた時、200冊あまり求めた別の小説から、恐らく読みかけの個所を示すための槩として使ったのであろう葉書が出てきた。宛名はロンドンの南部 Norwood の Laundlette 氏で、差し出し人はシンガポールを旅している Vansittait という名の人であった。このローンドレット氏が、この本の以前の持主であるとすれば、例の古本屋が言っていた英人で、商社マンか何かでしばらく日本に滞在し、やがて帰国するにあたって荷を造る時に不用なものを処分したのであろう。再び古本屋に立ち寄って、もう半年以上も前の話になる古書のことをたずねた。外国人のこういう滞在者をまわって、めずらしい本とか新しい雑誌類、またはポルノ写真などを集めて歩く仲買人がいて、そういう人たちの誰かがごそっと持ち込んだもの故、自分のところでも分からないし、その人たちも今では分からないだろう、との答えしかもらえなかった。かくなる上は、この持主と想像される人の住所に手紙を書くしかない。そうすれば、マギーについての何らかの手掛りが見つかるかも知れない。人が本を求めるとき、いちいちその著者

について調べるなどというのは研究者のもつ興味であって、一般読者は、素適な広告につられて買うとか、または店先でパラパラとめくって吟味する位のものである。私がロンドンに着いて、よく新しい小説類を買い込んだら、近所の郵便局長の奥さんが「フィクションなんて読んでしまえばおしまいなんだから、図書館に行ってみるといいわ。お金もったいない。」と言うのである。事実、公立図書館にゆくと、さして大きくないところでも、A～Zに作者別に並べられたすさまじい数の小説があり、ロレンスもマードックもそういう作家の一人でしかないことが分かった。

しかし、詩集は、自分の場合を考えても、だいぶ事情が違うように思う。詩集の初版刷というのは、部数の関係もあり、また形や紙質などに凝ることもあって、非常に高価につく。従って有名な詩人であるとするれば、やがて文庫本とか全集に収められるのを待ち、それまでは図書館その他で見せてもらう。それ以外に詩集をもっているとすれば、知人縁者の作品だとか、あるいは先生の作品を義理で求めたといったケースが多い。だから惚れ込んで買ったにせよ、その他にせよ、詩集の所有者は、他の小説類や参考書と異なり、必ず、その一つ一つに何らかの思い出を持っているにちがいない。持主であったと想像されるローンダレット氏のレパートリーの大部分は、既に述べた通り、中間小説的な作品であるが、しかしペーパー・カバーとは言えE・M・フォースターに関する批評なども含まれているところから判断すると、かなりの文学通かも知れない。とすると、マギーの詩集も、何らかの意図的選択により手にしたと考えられなくもない。そんな風にあれこれ想像したところで、もし古書の仲買人が何軒かから仕入れたものを、あの書店に卸したとしたら、これも全く無駄な空想にすぎなくなる。

何かを読んでいて、ふと席をたつとき、私は手許にあった友人からの葉書をそこにはさみ、少し頭を出しておいた。その時ある考えが浮かんだのである。ローンダレット氏には、もしやそういう癖があり、手あたり次第に何かをはさむのではないか？ だとすれば他の本にも何か手掛りとなるものがはさまれているかも知れない。果たしてその勘は的中した。ダイレ

クトメールの地図帖の広告とタイムの予約勧誘の他に、姪と思われる女性からおじ夫妻にあたる Mr. & Mrs. Laundrette 宛の絵葉書が出てきた。そしてうれしいことに、この三通は共に世田谷区奥沢にあったローンドレット氏の日本での仮寓に宛てられたものである。早速世田谷へ急いだことは言うまでもない。勿論目ざす人に会えるとは思っていなかったが、たとえばその家を会社が借り切っていたりすれば、前任者の消息など容易に分かるはずである。だが今度は期待に反し、家はすっかり釘づけされ、住む人もなく、近所の人のお話でも、どこか遠くに住む金持の持家で、噂では近くとりこわし建替えるらしいとのことであった。前に住んでいたイギリス人については、言葉の問題もあり、特に近しい人もこの辺にはなく、黒塗りの大型車にのって、どこかへ買い出しに行っていたらしく、タバコに至るまで近所の商店では買わなかった、という。それ以前には台湾人が住んでいて、とても人好きのする夫妻と三人のお嬢さんがいたが、そのあとに入った人には、誰も好意を示したものも、また示されたものもいなかったようである。それでも時々近くの私鉄の駅へ客を出迎えや見送りにゆく姿は見かけられているから、外人同士のつき合いはあったらしい。

差し出し人の姪であろう人は F. M. Sundler といった。投函地はクロイドン。はっきりと消印がある。この地名にはかなりはっきりとした記憶がある。何故なら D・H・ロレンスが初めて教師となった中学は The Davidson Road School といい、これがクロイドンにあり、いつか訪れることを夢みていた地名であったからだ。またしてもロンドン市のテムズ河から南の地域である。詩集の出版社の所在地アータベリしかり、ローンドレット氏の英国での住所と思われるノーウッド・ジャンクションしかりである。どうもロンドンの南東地区を中心に何か動いているような気がしてならない。サンドラさんの文面は、夏休みにおじさんおばさんにお会い出来るのを心まちにしている。すべて前に知らせた通りの予定で行動する。羽田まで迎えたのむ。Mr. Müller さんにもよろしくご伝声下さい。と結んでいる。日付は72年6月17日。この絵葉書のはさまれていたのは *Pan-Jamon* という題の小説で、作者は Jean-Yves Domalain と言い、

仏語からの翻訳小説である。絵葉書はハイランド地方の春の景色で、ロンドンの市内ではよく売っている平凡なものであり、サンドラさんの住所の表示はない。

この辺で、私の探索もほとんど終わりである。あとに残された方法として、小田原に住むという、ある大金持で、ロンドレットさんの日本での住まいの大家にあたる人にあたること、それと、ノーウッドに既に出した手紙の返事を待つこと、これ位しかなかった。前者は何か気のすすまぬこともあり躊躇していたが、やがて夏の休みも終わり、また多忙な生活が始まると、夏の日思い出の如く、この件は心の片すみに追いやられてしまった。

12月も暮れにせまった頃、私はロンドレット夫人から次のような手紙を受け取ったのである。

プロフェッサー・アイジマ

あなたにいただいたお手紙にお返事をすべき当の人は、凡そ4カ月まえ、2カ月ほどの病床生活の後に他界しました。一人になった私は、ロンドンに敢て住む必要もなく、生まれ故郷のサセックスへ移り、やはり未亡人となった姉と共に、甥夫婦の手厚い世話の下で暮らしています。いろいろ手間どり、そのためにお返事は遅れました。すみません。主人は読書は大変好きでしたが、詩を読んだのは長い一緒の生活の間にも見かけたことはありません。大概フィクションです。お申越しの詩集についても、それ故心あたりはありません。ただ私の姪が奥沢の家に、2カ月余り滞在していたことがありました。当時はブリクストン大学の学生で、秘書のコースをとっていたのですが、とてもロマンチックな子なので、あるいは彼女の本が、私たちの売り払ったものの中に入っていたかも知れません。お役にたてぬのが残念です。

日本にいたとき、いつもテムズ河を思い出しながら多摩川べりをドライブしたのを、今思い出しています。もう2年もたちました。ご幸福をお祈りします。

かしこ

折り返しお礼を兼ねてサセックスのホープという所へ手紙を書いた。たびたびしつこくて申訳ないが、私はどうしてもその詩人の消息が知りたい。姪ごさんにもしや手懸りとなるような事実を知らないかたずねてほしいと書いた。こういう時のために、私は返信用封筒を書き、それにはるイギリスの切手も用意してある。この返事を受けとるのに10日とかからなかった。

彼女はたしかに私の姪ですが、ある事情があって幼い時から親とはなれて育ちました。彼女は私たち夫婦を、あたかも本当の両親のように慕ってくれていました。でも悲しいことに、もう私のそばにはいません。それどころかどこにいるのかも分からないのです。2年前、ガイドのアメリカ人と共にどこかへ姿を消しました。あとには共に悲しい思い出に日をおくる私自身とその男の妻と二人の子が残っています。またしてもお役に立てずすみません。

ロンドンの南郊外の、名もない出版社で出された1冊の詩集。それが出版元近くのブリックストン大学の学生によって日本へ運ばれ、更にそれがおじ夫婦の手を通じて古書店の商品となり、それを一教師が何の目的もなく求め手にしてみると、旧知の一女性の作品であったというのである。この1冊の旅はこれでおしまいであろう。これ以上の探索は、自らロンドンに赴かざるには不可能である。かくしてロンドンへの旅がはじまるのである。

3 マギーをたずねて

私がロンドンに到着したのは春まだ浅い頃で、東京の2月に舞いもどったような不順な気候が続いていた。住居は地下鉄の北線沿線を考えていたのに、南を選んだ、否、選ばされたのは、全く偶然である。ジプシー・ヒルという地名で、これが何んと、当の詩集をめぐる地域から卑近の距離に位置していた。私の地域を管理するホーム・オフィスは**クロイドン**にあっ

て、移って来てすぐに登録しに出かけた。隣人に教えられ初めて行った図書館は徒歩10分位のところであったが、その名を、「公立ノーウッド図書館」といった。フラットには前の居住者の残していった6冊の電話帳があった。その1冊は *London Yellow Pages 1974, Classifield (South)* と表紙に刷られた文字通り黄色い本で、日本でいう職業別にあたる。ものめずらしも手伝って何か一つ引いてみようという気になった。道路の向こう側にみえる飲み屋は何という分類なのだろう。タバンかパブか、ラウンジか。先ずパブから調べてみた。どこも同じであるが、パブもこのロンドンの南地区だけでもすさまじい数であった。パブの項の次に Public Relations Consutants, Public Works Contractors, Publicity Specialist と小さな項目が続き、それに続いて Publishers and Publications という活字が目に入った。私の心は次の瞬間ハワード・ベイリイ社を探していた。しかし名は全くない。Hの項には、かの有名なハイネマン書店を頂点に、名も知らぬ出版社名はいくつも並んでいたけれど。

イギリス人は地図作りの名人だといわれる。ニコルソン社の *London Finder* は、道ゆく人は勿論、商品配達の車に置かれているのをしばしばみかけるが、これを使えばまずどんなところへでも出かけられる。地番のないのが難点ではあるが、私は地図をたよりにアータベリに出かけハワード社を探した。まず見当をつけるために、少し汚らしいが、Nu Book という本屋へ入った。この Nu とは、仏語の nu と英語の new をひっかけたもので、中はどの壁も、目のくらむような裸の写真の調であった。主人は、私が日本人だと分かると、非常に親しそうな表情になり、先年日本に行ったこと、新幹線がすばらしいサービスだったこと、スキヤキが美味であることなどをしきりと語った。そういう話をがまんしてきくのも、目指す目的のためには仕方のないことであった。漸く本題に入ると、私が調べたのよりは新しい黄表紙の電話帳をとり出し、「ナウ」といった。何か説明がきけるのかと期待していたが、後はくびをふるばかりであった。この「ナウ」はロンドン人特有の発音らしく now ではなく no であることを知ったのはその時がはじめてである。

そこへかなり太った、自動車整備工らしい汚れた白い衣服をつけた男が入ってきた。余程の常連らしく、主人は無言でカウンターの下からサッと数冊のポルノ小説をとり出し、並べた。禁制の品らしく、普段は飾っていないものである。いつまでもそこにいる私を追い払う手段か、突然その男にむかって、ハワードという出版社がこの通りにあったかな、という。

「そこをたずねて、この紳士は日本からわざわざ来なさったんだとき。」
「出版社は記憶にないけど、たしかそんな名の printer か stationer ならあったぞ。うーん、そうだ、この先の薬屋の左手にあるドアに書いてある名だ。」

お礼を言って早速立ち去った。はたして整備工氏の言の通りであった。ドアをあけると、すぐ目の前に階段があり、のぼってゆくと、通りのきれいな装飾とは全く異なり、貧民窟のような内部に、洋裁の仕立て内職をする明らかに主婦のパートタイマーたちの働く工場があった。ハワード社についてきくと、廊下を曲ったらすぐのところにもまたドアがあり、そこだと教えてくれた。遂にゆきついたのである。ベルを押し、返事のあるのを待ちながら、長いこれまでの過程を思っただけで感慨にふけていた。現われた男は印刷工だった。50がらみの、やはり黒くよごれた白衣を着ていた。はるばる日本から持ってきた詩集をとり出し、これはあなたのところで出したものですね、と幾分緊張し、うわずった声で質した。「そうらしいね、多分。それで何か。」らしいでは困るのである。私は要件を述べ、そのために日本から **all the way** やって来たのだと力を入れて発音した。「お話をきいて誠にお気の毒です。私はこの印刷所の主人ですが、前の所有者から譲り受け、息子と二人でやっています。その人は何でもかなりの負債を負ってロンドンを逃げだしたらしい。私は面識はありませんがね。もっとも商売で穴あけたのではなく、ジージーに狂ったのだそうだけど。（後で隣人となったオーストラリア人からジージーとは競馬のことだと教えられた。）本当をいうと、私たちは字もよく綴れませんからむずかしい仕事は出来ません。前の方は、郷土史を刷ったり、自分も文学が好きだったらしく、詩集なんかも出していたようだけど、私たちがここに移って来てか

ら、いくらか残っていた奴も皆処分してしまいましたよ。ところで、こう複写機のいいのが出来ちゃ、私たちの出来る仕事はなくなりました。閑ですよ。だから息子はペンキ屋の見習いにゆき、夜にちょっとやってるだけなんです。貧乏人はいつでも貧乏だね。」

日本だっのごく大手の出版社は別として、相当名の知られているところだっで従業員二・三人というのが多い。だからそれなりの覚悟はしていたものの、これほど見すばらしい印刷所で作られた詩集だとは考えてもみなかった。丸善の目録にないのは当然である。

ここまで来て、簡単にあきらめる訳にはゆかない。前の印刷屋さんの消息はわからないだろうか、と質してみた。「私たちもここは全くのストレンジャーなんでね。イギリス人はなかなかストレンジャーにはフレンドリにしてくれないんだ。ああそうだ、この道下がってゆくと4階だてのフラットの古いのがあり、あのベースメントにスコットさんという未亡人が住んでいる。この人はイギリス人だけど、いい人だよ。だんなが死んだとき、死亡通知を刷ったので知り合いになったんだ。退役軍人だとか言ったな。あの人、ここに27年も住んでいるから、詳しいよ。退屈しているから、あなたは歓迎されるでしょう。」

この印刷屋氏の言った「イギリス人だけどよい人だ」という言葉は印象的であった。後にスコットさんからきいたのだが、あの男は英領アフリカの出身で、現地人の女とイギリス人の男のハーフだという。「可哀そうに父親の顔も知らないんだそうよ。主人が亡くなったとき、悲しがって泣くうちの娘にむかって、『あなたは悲しめるお父さんをもててうらやましい』と言ったそうです。」と説明してくれた。

噂の通り、スコットさんは、もしこちらがその気なら、この辺りの一軒一軒の家庭の、パーソナル・ヒストリーでも語ってもらえるほど詳しく知っていた。だから話はあちこちへとび、本題にもどすのが大変だった。

例の印刷屋は、やはりカケに凝って借金がたまり倒産したのだった。どこかセンターの（東京都で言えば都区内にあたる表現で、ロンドン人はよく使う。）大きな印刷屋で修業し、15年ほど前に独立してこの地に開業し

たのである。本人はスコットランド人だと称していたが、顔つきはジプシーの血が混っている独特な表情で、服装などにも凝り、なかなかの伊達男だった。本来は無知な人間に違いないが、自分のところで印刷した同人誌や詩集などの関係から知り合った人たちの影響もあり、自分も詩などを書くようになった。スコット夫人も Nathda の Drama Festival で、ベイリーさんに会ったことがある。かくするうちに女房の遠縁にあたる女性と関係が出来、セコンド・トレイド（バイトにあたる表現）からの収入が必要になった。何分女房に知られては困るからであろう。最もたやすく見え、もっとも危険なトランプ博打や競馬に夢中になっているうちに、借金は思いもよらぬ額へとかさみ、気がついた時には、女房子供、おまけにその女にまで逃げられてしまったのだという。仕方なくその穴うめに店を手放し、自らもどこかへ消えて行った。

もう仕方ないから暇乞いをしていると、スコット夫人は何かをしきりに思い出そうとしている様子だった。勿論、私の方も、この件について知っている凡ゆることを披露し、もしやと思ってローンドレット氏の話までもち出したのであったが無駄であった。その時、“Oh, dear me! It’s Mr. Goodfellow. James Goodfellow.” と、大げさな表情で言ったのである。グッドフェロー氏はここから少しはなれたセント・ジェラルド中高等学校の教師で、文学サークルを主宰していた。ベイリー氏のところへは時々来ていたし、二人で連れだってストリートを歩く姿もみかけたのはしばしばであった。どうもベイリーさんには似つかわしくない友だちだと、自動洗濯屋のウインド越しに外をみて話したら、やはり近所のホットキンさんの奥さんが、自分の子供の学校の先生で、ジェイムズ・グッドフェローという人だと教えてくれました。ジェイムズというのは平凡だけど、私の女グッド・フェロー婿と同じ名ですし、あの時ホットキンさんが、その名の通りよい人だそうよ、と冗談を言ったので、覚えたんです。顔をみかけた時は、その名を心の中でくり返していたのですが、ベイリーさんがいなくなっからはとんとこの通りにはこないのよ、ちょっと思い出せなかったのよ。」

電話帳を早速めくってくれたけれど、その名は載っていなかった。仕方

なく日を改めて、その学校へ先生をたずねることにして、少しも暗くはならないが、夕方かなり遅い時間にスコット家を出た。

4 マギーはイギリス人ではなかった

文学サークル“Freiheit”のかつての主宰者グッドフェロー氏に会えたのはその数日後のことである。氏はすでに学校教師をやめていて、学校で教えられた住所も古いもので、ヒントにはなかったが、直接の役にはたたなかった。50に近いと思われたが、西洋人によくある独身者で、1ルームのBB (Bed & Breakfast) 住まいだった。街中にあるBBは旅の者の安宿であるが、さしたる観光地もなく、しかも裏町のこのBBはいわば下宿屋であった。

「みな夢ですよ。いや悪夢です。」私が訪問の趣旨を述べ終わると、それまでじっと耳をすましてきいていた氏が、幾分自嘲的な笑いを浮かべて言ったことばだった。部屋は極めて乱雑で、あちこちに本や書きちらした手紙などがところかまわず置き放たれ、ベッドの上には、山で使うような寝袋が、今しがた氏がそこから這い出して来たままのように、くちゃくちゃで長いままになっていた。

フェロー氏は前述のサークルの責任者のようにされたけれど、何となく集って話した仲間が、そういう風にしゃべったことをまとめて雑誌を出そうとした時、教師であり、比較的閑達ということで、編集を引きうけただけで、特別にリーダーだというのではなかった。この仲間たちは、よるとさわると自由とか平等とかについて語り合ったために、サークルの名をつけ、雑誌を出す時になって、仲間の一人が“Frei & Gleichheit”という名を提案した。平凡な名ではあるが、彼らの気持ちをよく表わしていた。しかし何分にも長たらしいし、また完全な自由 (Freiheit) は、平等 (Gleichheit) をも抱括するという合意のもとに、その一方だけをとったのである。「金持にとって金は当然の存在で、金をしきりと求める奴は皆貧乏人なんです。金持の癖に金を貪欲に求める奴は、過去に貧乏だった苦しい経験があるんです。ちょうどそれと同様に、当然なこととして、自由

や平等を享受して来た人間なら、そんな明白なことを改まった言葉におきかえようなんてしないものです。D・H・ロレンスは生涯自分が下層階級の出身であることに劣等感をもっていました。しかし私たちはそんな意識さえも持ったことはありません。物心ついた時から、もう無国籍者といってもよかったです。そういう連中のあつまりでしたから「自由」だの「平等」だのと語り合っただけの一種の自慰作用をしていたのですね。」

グッドフェロー氏は、マギー・ランドについても、またロンドレット氏の姪サンドラさんについてもよく知っていた。二人ともやはり文学の仲間であった。マギーは5号まで出た『自由』誌に数篇の詩を公表した。恐らくそれを読んで、サンドラは仲間になったのだろうと言う。マギーの心を射抜くような詩は読者にも受けがたく、雑誌に挿んだアンケート用紙が一割位回収されると、必ずと言ってよいほど彼女の作品についての感想が書かれていた。毎回500部近くを、足を棒にして歩き買ってもらった。印刷屋のベイリー氏も非常に協力的で、自らの体を働かした分だけ赤字になる位、全ては原価でやってくれた。ここに掲載されたものに手を加え、また書き足して、自分たちで単行本を作る話がもち上がった。第1回目はCowsland というやはり女性の小学校教師が書いた童話に知人のさし絵画家が絵を描き、単色刷りながらまずまずのものが出来た。69年の8月下旬のことである。第2回目はマギーの詩集であった。*Engraving* は既に述べた形で、150部刷られたのである。ハワード・ベイリー・プレスなる出版社は、この作品集の発行所として架空につくられた会社であって、ハワードというのもベイリー氏の本名ではない。仲間のひとりで、インド人との混血の青年がいて、たまたまその時手に持っていたペンギン文庫の『ハワーズ・エンド』からとったのだという。

さて、マギーはどうしているのだろうか。勿論今までなされたグッドフェロー氏との会話の前にそれは質してあった。マギーは既にこの世の人ではなかった。71年の9月、かって私に故郷だと告げ、後に分かったところによれば第二の故郷であった Land's End に近い白砂湾 (Whitesand Bay) で入水自殺をしたのである。10月の初め、それはロンドンの冬のき

ざしの、どんよりと曇った日であったが、グッドフェロー氏が学校から帰ると一通の手紙が来ていた。ユーンウォールのオーソリティズからで、水死体のもちものと思われるハンドバッグの中から、身元を確認出来そうな人の名が二人出てきて、その一人はI氏（本人のために特に匿名とする）もう一人はグッドフェロー氏だという。驚いた氏は、すぐに仲間と連絡をとる。メカニック・エンジニアのポールが休みをとって車で先端の土地にむけてその夜のうちに出発することになった。車に五人は乗れたが、実際に時間の都合のつくのはポールと二人きりだった。いよいよ出発というときにサンドラが大きな紙袋を二つもってグッドフェロー氏の下宿にやってきた。「私もつれてって」というので、三人で出掛けることになった。サンドラの袋の一つには食料品がぎっしりつまり、他方は色とりどりの生花で一杯だった。ほんの1週間ほど前、ブリクストンの露店で、サンドラはマギーに会ったばかりだった。双方に連れもあったことで、ほんの立ち話し程度で切り上げたが、それでも元気そうな様子と、いつものにこやかな笑いは、マギーの生活の無事なることを示しているようだった。後々に、幾度も皆で集まってはその話をしたけれど、仲間の誰一人として死の動機を知るものはなかった。死の寸前まで住んでいたフラットだって、女性特有の几帳面さから、よく片づいてはいたけれども、机の引き出しには書きかけの手紙が無造作に入っていたり、その他自殺を覚悟した人間の身辺整理とはほど遠いものであったという。彼女には全く親類縁者がいないらしい。彼女はそういう話題になると殊さら避けている様子であり、従って死後荷物の整理や処分も『自由』の仲間たちがあたった。グッドフェロー氏は、いずれ彼女の遺稿集を出したいと思い、先ずタイプで略年譜を作った。次に彼自らの筆になる序文を書いた。かくするうちに、ベイリイ社は倒産し、雑誌も出なくなり、サークルも自然消滅、氏自身も不眠症から一種のノイローゼとなって学校をやめることになってしまった。

私の懇願によってマギーの手紙類や原稿を束ねた包みを、氏はしぶしぶ貸してくれた。“A week **sharp!**”と少しカン高く、ストレスを置いて言ったのち、また、いつものボンボンという、ききとりにくい声で「忘れる

ことです。夢は忘れることです。まして悪夢は。マギーは忘れることが出来ずに死んだのです。最初私は彼女の遺稿を世に出すことが、私のつとめだと考えていました。しかしもはやそうではありません。このままそっとして、彼女の思い出がみんなの脳裏から消えてゆくことが、一番彼女の posthumous life を安らかにするのじゃないかと思うようになってきているんです。」とつづけた。

とまれ、略年譜の第一行目は次の通りである。

born on Sept. 1, 1942 in a small town of **Lithuania**

5 祖国、恋、死

ルトアニアという名をきいたのは初めてではなかったが、私の関心を引くこともなく今日まで過ぎてしまい、正確な位置も今回はじめて知ったのであった。まだロンドンに着いて日も浅く、やっと手に入れたルトアニアの短い記事をよんでいると、隣人のオーストラリア人の薬学者がお茶によんでくれた。「日本人学者の例にもれず、あなたも随分ハードワーカーですね。」と半分皮肉ともとれる口調で言った。何分この人は、朝2時間の勉強が日課で、あとは山のような新聞を買い込み、競馬の予想をあれこれたてては、丘の上の馬券売場に飛んでゆき、今日は何ポンド勝った負けたとやっているのである。チェスもゴルフもやったことのない私など怪物の親類位にしか思えないだろう。お陰で私は新聞を買わなくても毎日もらえる。

無駄と知りながら「ある詩人のことを知りたいと思って調べたら、その人はルトアニア人なんです。そんな国のこときいたこともないので、さっきからちょっと読んでいたのです。」といった。その教授の顔に興味ありげな表情が浮かんだ。

「もしよかったら1冊簡単なパンフレットをさし上げましょうか。」

「ええ、うれしいです。先生も興味があるのですか、その国に。それとも何か研究上の必要でも？」

「実を言いますと、私はルトアニア人なのです。」

「ええ？あなたはオーストラリア人だとおっしゃいましたね。それに先日お子さんのパスポートを拝見したら、オーストラリア政府の発行になっていました。」

「その通りです。私は高校を終えるまでレトアニア人でした。しかしその後祖国を捨てて、オーストラリア国籍となりました。母がオーストラリア人だったからです。兄弟はレトアニアにいます。私自身はレトアニア語を忘れかけ、兄弟はレトアニア語しか分かりませんから、手紙を書いてもチンプンカンプンになりました。兄の誕生日だと思っていた日に、レトアニア語でおめでとうと言ってやったのです。すると返事は長くて、ロンドンにいるレトアニア人に一部は訳してもらったのですが、兄は『お前の誕生日が今月だとは知らなかった。おめでとう』と書いてきました。ことばを忘れる度合いだけ祖国からはなれてゆくのです。」

「どうして捨てる (abandon) なんて表現をされるのですか。」

「私は自由が好きなのです。何にも束縛されない自由が。私のいう意味の自由はあそこにはもうありません。私はそのために祖国を捨てた人を随分知っています。二次大戦のあとには、イギリスへ帰化した人もたくさんいます。」

「どんなところなのでしょう。」

「それは美しい小さな国です。近代的な建造物がたったとは言え、自然の大部分はいまだにそこなわれてはいないでしょう。今はソ連共和国の中の一国です。1944年にソ連に併合 (annex) されたのですが、私は占領 (occupy) と考えています。」

お茶が終わって帰るとき、約束通りの小冊子を手渡してくれた。“Lithuania Today 10” と大きな字で書かれ、片すみに “The Luthuanian Society For Friendship And Cultural Relations With Foreign Countries” と小さい字で記してある。彼は、幾分しっこいとも思われる調子で、これはあくまでソ連側の宣伝文章だからそのつもりで読むようにと繰り返した。氏の言う如くたしかにソ連を讃美する言辭がいたるところに見える。ある記念碑の写真には何の説明もなく、ただ “We shall

never forget the Soviet soldiers who died for our freedom!”とあるのみだったし“Today we pronounce with love and veneration the names of Heroes of the Soviet Union……”という類の表現もほんの一例にすぎない。

さてグッドフェロー氏の作製した年譜によると、マギーは1945年11月、満3歳の誕生日を迎えると間もなく、両親と共にイギリスに渡り、南西の極端に住むようになった。先述の薬学者は Baltinas（「バルチック海」の意）というが、彼の述べたように自由を求めて祖国を捨てたのかどうかは不明としても、45年は、ルツアニアが併合された翌年であり、また二次大戦の終わった年でもある。両親が何らかの政治的な立場での不都合のために、併合された後の政治体制が出来かかりつつある中で住みにくくなったのかも知れない。それには何の根拠もないが、戦後の混乱期に、住み慣れた故郷をはなれ、異国におもむくというのは、やはり異常な行動と言わざるをえない。兄弟については、いたものか、一人子だったかも知られていない。プリマスで秘書コースの学校に入って間もなく、彼女は19歳の時、はるばる日本までやってきたのだった。行き帰りに香港に寄って旅行費用を作るためのジョブをしたらしい。プリマスの学生だった頃に小さな、しかしまだ幼な少女には、大きな意味をもつ恋をした。一度は彼にもらった指環が指にひかっていた時期もあった。私に涙を流して語ったのはこの恋であったかも知れない。そしてそれを忘れ、新しい生活へのスプリング・ボードとして東洋へ旅立ったのだらう。

いくつかの紆余曲折はあったかも知れぬが、私に葉書をくれた1966年頃？ロンドンに出て来て、初めは会計事務所、次には不動産屋で事務員として働いた。その後ははっきりしないけれど、1968年頃、今までのセンターから南東部へ住居を移し、ある私立大学へ、やはり事務員として勤めるようになった。Research Data Center（研究資料センター）の勤務となり、カード写しや教授たちへのお茶のサービスなどが主な仕事だったが、比較的閑な仕事で、学生図書館の本も自由に利用でき、本当の意味で勉強できる環境だった。今はアメリカの大学で職を得ているI氏と知り合

ったのはちょうどその頃であった。若手の研究者である彼は、シェフィールドとロンドンで学生生活をおくり、恐らく一時の腰掛けとしてこの私立大学へ就職したのだろう。将来有望な人らしく、控え目な中にも自信に満ち、若きマギーに対しては、特にやさしかった。彼女とて、このハンサムな若者にひかれぬ訳はなかった。だが彼女の心底では、男はこわいという気持ちが常に働いていて、その感情を恋へまで高めることは出来なかった。

ある日のこと、彼は資料室に、ビニールケースに入ったとても可愛らしい小さな人形をおき忘れていった。「私にくださったのかしら。」という秘かな期待はあったが、念のため研究室に連絡した。電話は通話中で10分ほどの間に何度か掛けても通じなく、やっとコールサインがなったときには、いつまでも鳴りっぱなしで、相手は電話口に出なかった。恐らく席をはずしているか、帰宅してしまっていたのだろう。資料室勤務では、個々の教授たちの詳しい経歴や個人生活については全くわからず、雑談のはしはしに出る断片をつなぎ合わせて、その先生の生活ぶりが自然に分かってくる位であった。ある老教授の下のお子さんが結婚したといった類の情報は「やれやれこれでもう安心して死ねるよ。」なんて話から分かった。あの若き研究者が、シェフィールドの資産家の出らしいという噂はきいていた。老教師のように個人的な話をするかわりに、彼は「今、何読んでいるの?」とか「テイトギャラリーでやっている展示みた方がいいよ。」といった、いかにも親切な声のかけかただった。このお人形が、もし私に下さったのだとしたら、と思うと、彼女は胸が高鳴って夜もろくに眠れなかった。翌日大学へ出て早速研究室に連絡すると、「ああ、そこだったのか。娘の誕生日のプレゼントだったのになくしてしまってね。すぐゆくからとっておいてね。」と電話を切った。

夢は破れた。しかしほっとしたというのも事実である。相手が子供まである既婚者であるとすれば、私は裏切られることもないし、裏切ることもない。そう思うと、彼女は前にもましてのびのびと若き研究者の前で振舞うことが出来るようになった。

一方彼の方では、この若い乙女の輝くような美しさにどんどん引かれて

いった。小柄で、どこかフランス娘の感じがするブロンドで、後にもっと親密な関係になった時に知りおどろいたのだが、逆算するとこの頃既に26歳になっていた。どう見ても20を少し出た女としか見えなかった。自分の妻は、人も羨む美人である。同郷の出身ながら、少女のときからスイスのレマン湖畔にある寄宿学校で教養ある女性として修めるべきものは全て身につけてきた。大学は自分と同学年であり、在学中に恋をして結ばれたのであった。一人の娘が生まれると、もう妻の座が安定した不動のものとなり、同時に全くみずみずさを欠いた、ただの女になり下がってしまった。否、ただの女ならまだいい。生まれつきの顔が美しく、教育を十分受けているという自意識のあるその分だけ、醜く、無教養に思われて仕方がなかった。

ある晴れた午後、街を歩いていると、彼女らしいうしろ姿が、何かけだるそうな足どりで道をゆくのがあった。^{うなじ}項あたりの感じはたしかにマギーだが、他の様子には何かずっと歳とった女の雰囲気があった。彼は足早やに歩き、追いつくと、全く偶然気づいたように声をかけた。「やあ、もうお帰り?」「ええ、今日は半日勤務なのです。」「ウインピーにでも入ろうか。何かごちそうしよう。』

ウインピーというのは、イギリス中いたるところにあるチェーンの安喫茶兼食堂で、チップの必要もなく、誰もが気楽に入れるところである。

…あのときのうれしさを何に譬えたらいいでしょう。きっと今まで誰にも見せたことのない輝く笑顔であったと思います。私には時たま会う仲間の他に、誰一人友達はおりませんでした。その仲間とて、今でははじめの新鮮が失われ、絶望的で馬鹿げたこの社会をののしり、そこからの逃避を企てるのに役だつのみで、この世の生を、生きぬく価値あるものだという勇気と希望を与えてはくれませんでした。あの時のうしろ姿が、随分年よりじみて見えたとおっしゃったことがありました。偶然会ったあの時でなくても、私の姿はいつも同じだったに違いありません。あなたにはお分かりにならないでしょうが、誰も待っていてくれない部

屋に帰るさびしさ、いや、それならせめて先に帰って誰かを待つ身になればいいのですが、それも出来ぬ女のかなしさは想像を絶するものです。あなたと知り合わなければ、恐らく結婚することになったであろうある高校の先生も、決してそれほど好きだという訳でもなく、まして恋していた訳ではありませんが、結婚に何の期待がもてなくとも、この哀しさ、寂しさだけは紛らわすことが出来るだろうと考えていました。……

(I氏宛書簡のコピー)

マギーの孤独な心に、I氏のやさしさは真まで滲みた。彼も妻にはない女のいとしさを見た。二人の逢引きが、これ以後急速に回数をもした。週末をケムブリッジで過ごしたこともあったし、ポーツマス海へ遊びに出かけもした。

人が人を好きになる。これは誰にも止めることは出来ない。マギーは、たとえ妻子ある男であるとしても、彼を好きになったことを少しも恥じてはいなかった。二人でいれば時間はどんどんたち、この世にこんな楽しいことがあろうなどとは想像もしていなかった。子供の時からの満たされぬ生活は、故国を捨てた時から始まったのであった。しかし何か間違っている。この愛は何も生まない。彼は非常に自分を大切にしてくれるし、心から愛していてくれるのも本当だろう。でも日向に出られぬ愛が本当の愛と言えるだろうか。そうマギーは考え出したのである。

I・マードックの作品『切られた首』の中で、大学の若い研究者ジョージという女性と、大手のブドウ酒商で、歴史の研究者でもあるマーティンは、single adultery の関係であるが、あるときジョージは彼にむかってこういふのである。

“Your love is very great, but not infinite.” (「あなたの愛はたしかに大きいけれど、決して無限ではないわ。」)

この『切られた首』のコンテクストで、ジョージの存在はどれも曖昧

に思えて仕方がないが、単純な男女の会話として考えた場合、常に妻の目を恐れ、そのくせ若い女をも捨てられないマーティンは、二人の女性の心をもてあそんでいるとしかジョージーには映らなかったのであろう。

愛に終わりのあることは世の常である。しかし現在愛しあっている二人の愛が本物なら、前後をカットした現時点においては、少なくとも無限の可能性を孕み、二人の力を併せることによって障害をのり越えようとするだろう。あるいは、その愛が本もの故、別れがまっているかも知れない。

マギーは、彼との愛に生命を与えてやるか、それとも、今はどんなにつらくとも彼とは二度と会わぬ世界に姿を消さなければならない—そのいずれかしか選ぶ道はなかった。彼女は彼に決断をせまった。「あなたは奥さんを選ぶか私を選ぶかしなくてはいけないのよ。」繰り返しそう言った。彼にも十分その趣旨は分かったが、もう少し時間がほしかった。彼はマギーを選ぶ決意はほぼ出来ていた。あとは子供をどうするか、大学の仲間たちにどう説明するか、また両方の両親をどう説得するか、といった問題が残っていた。マギーと二人きりで、これらの議論をしていると、何だかごくつまらない問題に思えるが、家に帰って可愛いらしくなりかけた娘が、よちよちと玄関まで迎えに来たりすると、殊のほか心が痛んだ。マギーには彼がこの件をカッユウよく処理しようとしているように思えて仕方なかった。そんな風には絶対にゆかない。最悪の場合は、二人して地獄へ落ちる覚悟がなくてはならぬだろう。そして許されるかどうかは分からぬとしても、まず彼の妻に対して、二人で心から詫びなくてはならない。彼がたとえこのまま妻のところへもどってゆくとしても、その手続きをしなければ、私が去った後でも、妻の不平を言いつづけ、家庭を不幸に陥れるに違いない。彼は自分が次第にどこかに追い込まれてゆくのを感じた。マギーを失いたくないのは本当だった。そのマギーのためにも、妻にあまり不意で残酷な仕打ちはしたくなかった。マギーは「人生観の違いなのね。もうだめだわ。」といい、彼も「もうどうにもならぬから清算しよう。」と言った。

I・マードックには、ちょうど同じようなケースの描写がある。『砂の城』の最後の方で、女流画家レインを恋した中年の教師モアが、さまざま

な世間の絆を断ち切れずに、その恋を失ってしまう。前校長デモイトの家にゆくと、レインは荷物をまとめて、車で去っていった後であった。デモイトは、「君が奥さんのところへ無事もどって目出度し目出度しだ」とは決して言わずに、いきなり怒りをこめてふるえながら次のように述べるのである。

Why did you leave her? Why did you leave her for a single moment? *You must have willed to lose her!* (「お前はあの人を失うのを望んでいたにちがいない。」)

そして続けるのである。

“Coward and fool.” … “Nothing was inevitable here. You have made your own future.” “Do not deceive yourself. … you may meet her once more by accident in ten years’ time at a party when you are fat and bald and she is married.”

「憶病な馬鹿めが、その気になりゃ何だって出来たんだ。これから先のことは自分で選んだのだよ。自分をあざむくのもいい加減にしろ。10年も経てば、どこかのパーティーでひょっこりあの人に会うことがあるやも知れんが、その時のおまえのざまときたら、腹がツン出てツルツル頭、おまけに彼女は人の奥さんになっているさ。」

たとえ無意識のうちでも、二人は二人の道を選んだのである。マギーは彼にどこまでもついてゆくことによっていつか二人が結婚というゴールへは達せられるだろうと考えていた。しかしその先の見透しのたたぬ愛で、多くの人たちを不幸にたくはなかった。彼に反抗することによって一つの道を選んだのである。彼も、マギーのためなら、今まで歩いて来た道も全て捨て、世間に背を向けても生きてゆくという決意は出来なかった。かくしてまた一つの道を選んだのであった。

マギーは大学をやめて、クロイドンのスーパー・マーケットに職を求めた。恋に夢中だった一時期遠ざかっていた文学の仲間との交流もまたはじまり、最近自分の詩を読んでくれたことが縁となって友達となった若い大学生サンドラとも親しくなった。

彼はアメリカのある大学へ妻子ともども赴任したと、風のたよりにきいた。もうどうでもいいことである。だが、人を愛してはじめて、こんなに優しくなれる自分を発見出来たことは、彼にどんなに感謝しても足りぬほどである。彼を決して恨んでなんかいない。二人の女を一個の人間として扱ってくれたのだもの。私が退いた分だけ奥さんやお嬢さんを幸せにしてやってほしい。これが彼女の彼に対する唯一の要求だった。

彼女が入水した海岸は、前年の夏に二人でレンタカーを運転して行った思い出の場所であった、ということが、日記を詳細に調べたグッドフェロー氏の話で分かった。

エピローグ

マギーはたった1冊の、しかも架空の出版社から出された詩集があるのみだから、女流詩人などという名称は大げさだったかも知れない。しかしかつて小池玲子という私の教えていた学校の生徒は、『赤い小馬』という遺稿詩集によって、数は少ないが永遠の読者を獲得したのである。

「早逝の詩人はしばしばその死のあとに衝撃と伝説を残すものである。また詩人の突然の死が、生の帰結というより新たな原点となって、それまでの生涯が死の時点から逆に光をあてられ意味を顕わにする場合がある。」——とは小塩トシ子氏の優れた論文「シルヴィア・プラーズの詩」（『オペロン』第14巻第2号南雲堂）の書き出しである。私にとってマギーをたずねる旅が、今まで思いもよらなかった愛と死の問題や民族の問題にまで出遭うきっかけとなった。しかし「すべては夢——それも悪夢」というグッドフェロー氏のことばもずっしりと重い。付言すると、氏はあのBBをひき払い、どこかへ旅に出るとのことと、一葉の通知があった。私にあの書

類を私に預けるようにと言いたくてBBへ飛んで行ったが、既に別な住人が入っていた。

このレポートでは、レトアニアの問題と、マギー自身とのかかわりは述べなかった。たった1週間の約束で借りた書類なので十分読みこめなかったが、やはり祖国をはなれた裏には何かがありそうな気配だった。レトアニア人の女流詩人 Saloméja Nėris の “Like A Piece of Amber” (「ひとかけらの琥珀のように」) と題するレトアニアをうたった詩が、バルテイナス氏言うところのソ連側の文献の巻頭を飾っている。次のように書き出している。

Small, yet lovely is my native country,
Like a piece of amber, of her gold.
Her adorns on tissues woven gently
And her songs delight my heart of old.

.....

*She no longer fears for interventions
Safely living under Giant's wing.*

この国はもう干渉を恐れることなく
大きな翼の下で安全に暮らしている。

最後の二行に何か抵抗を感じるのは、私の偏見であろうか。この詩人はここに何かをうたい込んでいるのではないだろうか。

とまれこの旅はここで終わりである。マギーの霊をなぐさむために、仏教徒である私は、「般若心経」を唱えることにしよう。

1976年5月23日 ロンドンにて

付記 英語で college は凡そ3通りの意味に使われる。Oxbridgeをはじめとする university は college の集合体で、「学寮」などと訳される。次は Eton, Harrow に代表される university への予備門の学校。そして、各地方都市にある technical college で必ずしも工科大学ではなく、職業専門学校的性格がつよい。最近では校名から technical を取り除き South London College といった風の表記をするところが多い。本文中の「大学」はこの最後の college につけた便宜的名称である。